慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	富士五十句
Sub Title	
Author	前北, 馨(Maekita, Kaoru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2002
Jtitle	三田國文 No.36 (2002. 6) ,p.1- 9
JaLC DOI	10.14991/002.20020600-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20020600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

富士五十句

前北　馨

はじめに

授業で富士の発句を集める機会があり、本文の怪しいものも含めて二百数十句が手元にある。全てを論じるには実力不足なので、五十句だけ抽出して簡単な注釈を試みた。

・五十句は、なるべく季題のバリエーションに富むように選んだ。
・配列は概ね作者の生年順となっており、生年のわからない場合は、同時代の作者の間に適当に挿入した。
・句の引用にあたって、前書は省き、必要なものは注釈の中で触れた。濁点、半濁点は補った。
・句集名に付した丸数字は、使用したテキストを示すためのもので、引用文献一覧としてまとめて出所を明らかにした。
・煩瑣なので、発句以外の引用について、使用したテキストを示すことはしなかった。

富士五十句

元朝の見る物にせん富士の山　　宗鑑

『俳諧古選』①所収。季題は「元朝」で春。ところで、「初富士」という季題を最初に収録した歳時記は、天保九年刊の『東都歳時記』だ。「初夢」に関連してではなく、「景物」として収めていて、この句を引いている。その後の、網羅的に季題を集めている『増補俳諧歳時記栞草』や新しい季題に敏感な『季寄新題集』に入っていないのは、どのような事情からだろうか。

武蔵野の雪ころばしか富士の山　　徳元

『犬子集』②所収。季題は「雪ころばし」で冬。雪の玉を作り、雪の上を転がして大きなかたまりにしたもの。武蔵野と富士を一つの景と捕らえて詠むことは、『新後拾遺集』の「富士のねをふりさけみれば白雪の尾花に続く武蔵のの原（九二二・藤原長秀）」あたりにルーツをたどれる。以降も度々行われており、「武蔵野や富士の霰のこけ所　其角」（『五元集拾遺』③）などの例がある。

前書に「武州江戸にて」とあり、また徳元の句集『塵塚誹諧集』に「同（寛政五）年霜月、於武州江戸人々御所望によりて、つかふまつりし千句の発句」とある。江戸の景物として、富士を詠んだことがわかる。

鶯の題目のみや富士門徒　　貞徳

『崑山集』②所収。季題は「鶯」で春。「富士門徒」は、日蓮宗の一派である富士派の門徒。鳴き声と題目を洒落ただけだが、「鶯」と「富士」の取り合わせが新しい。

雪汁も湖ほどやふじの山　　重頼

『犬子集』②所収。季題は「雪汁」で春。雪どけ水のこと。富士五湖を念頭に置いて詠んだものだろう。重頼の『毛吹草』では「誹諧四季之詞」の「霜月」に入れられているが、「連歌四季之詞」の「初春」に「雪解」を入れており、またこの句に照らし合わせてもおかしい。

富士の雪汁は、『源平盛衰記』巻三十四、「佐々木賜生嗟」に「正月十日余ノ事ナレバ、富士ノスソノ、雪汁ニ、富士ノ川水マサリツヽ、東西ノ岸ヲ浸タレバ、タヤスク渡スベキ様ナシ。」とその甚だしい様が描かれている。ここも、正月となっているので、春。

富士山ややく武蔵野ゝ煙出し　　安明

『崑山集』②所収。季題は「野焼」で春。武蔵野と富士を一つに詠むことは、前に書いたが、富士の煙を野焼の煙に見立てた趣向が珍しい。

もちに消ゆる氷砂糖かふじの雪　　梅翁

『梅翁宗因発句集』④所収。季題は「ふじの雪消」で夏。『万葉集』の「富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり（三二〇）」を下敷きにしている。それに、餅にかけた氷砂糖が解けて消えるというのが掛けてある。

「富士の雪解」は、今も昔も夏の季題として歳時記に収められている。だが、「ふじの雪」を季題とするかについては、歳時記によって大きく二つの立場があった。貞徳の『御傘』はこの『万葉集』の歌を引き、また宗祇、宗長の説を重視して「雑」とする立場、梅翁の『俳無言』は『新古今集』やその後の『風雅集』『新千載集』の冬の部に歌が見えることから「冬」とする立場をとっている。以降、徐々に「冬」に落ち着いていく。

市中や木の葉も落ずふじ颪　　桃隣

『炭俵』⑤所収。季題は「木の葉」で冬。桃隣は、伊賀上野の人で、後に江戸に移る。「市中」は、江戸と考えて良いだろう。遠く見えている富士の方からの木の葉も落とさない弱々しい風を、さぞかし厳しい「ふじ颪」だろうと想像した句だ。『芭蕉七部集』（新日本古典文学大系）の注に「巻きあげた木の葉一枚地上に落さず吹き抜けていく。」とあるが、木の葉が落ちるといえば「落葉」と取るのが自然だろう。また、木の葉を巻きあげているのでは、わざわざ、「市中や」と富士からの遠さを打ち出している意味がない。

唐土に富士あらばけふの月もみよ　　素堂

『あら野』⑤所収。前書に「九月十三夜」とあるので、これが季題。秋。『増補俳諧歳時記栞草』に「高潔云、十三夜の月見は我朝の風也。」とある。徳元の「武蔵野の」や前の「市中や」の句に見られた「江戸の富士」に対して、「日本の富士」という格。

富士ひとつこゝろがゝりよ河豚汁　　如泉

『千鳥掛』⑥所収。季題は「河豚汁」で冬。美味だが毒のある河豚汁を食べるにあたって、まだ富士を見ていないことが心残りだという句だ。「鰒食はぬ人と富士見ぬ人愚なり／重厚」（『俳諧発句題叢』⑦）という句もあるが、こちらは河豚も富士も知っている人の句だ。河豚と富士は、音が似ていることも対照される一因だろうか。

目にかゝる時や殊さら五月富士　　芭蕉

『芭蕉句選』⑧所収。季題は「五月」で夏。現在、多くの歳時記で、「五月富士」という題を立てている。雪解頃の富士のことだが、その初めがこの句だろう。雪をかぶっていた富士が、夏を迎えて黒々としてきたのが新鮮だということ。『万葉集』で「時じくそ　雪は降りける（三一七）」と詠まれて以来の伝統的な詠み方を打ち破って、夏になると雪の消える実際の富士山を詠んでいる点が新しい。もちろん、用語も新しい。

一尾根はしぐるゝ雲か富士の雪　　芭蕉

『芭蕉翁発句集』④所収。季題は「しぐれ」で冬。雪に覆われた富士にかかる雲が、まるで尾根のように見えるということだ。「しぐるゝ」としたのは、雲に動きがあるということだろうか。そうなると「一尾根は」の表現としっくりこない。「富士の雪」では季があやういので、「しぐれ」で季を固めたとみるべきだろう。

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き　　芭蕉

『野ざらし紀行』⑨所収。季題は「霧」で秋。「霧しぐれ」とは、時雨が降るように、深く立ちこめた霧のこと。「関越ゆる日は雨降りて、山皆雲にかくれたり」とあり、箱根の関からの景色だ。几董の「富士に添て富士見ぬ空ぞ雪の原」（『井華集』⑩）も同じ趣向だが、芭蕉の句は「日」といったことで、それまでの富士を見ながらの旅路が想像されて面白い。『野ざらし紀行』には、他に「深川や芭蕉を富士に預け行く／千里」もある。

鳴千鳥富士を見かへれ塩見坂　　杉風

『続虚栗』⑪所収。季題は「千鳥」で冬。『杉風句集』の前書に「ばせを翁へ餞別」とある。旅立っていく芭蕉を「千鳥」に見立てたわけだ。「塩見坂」は、東海道で富士の見える西端で、今の静岡県湖西市にある。逆ルートだが、尭孝の『覧富士記』に「今日なむ遠江国塩見坂に至りおはします。（中略）雲水茫々たる遠方に、富士の嶺まがひなく現れ侍り。」と出てくる。

雪見るや必らず富士の物がたり　　正甫

『俳諧古選』①所収。季題は「雪」で冬。この場合、「富士の雪」とはならない。「富士といえば雪」は珍しくないが、「雪といえば富士」は珍しい。「富士といえば雪」の方になるが、「いつもながら雪は降りけり富士の山／鬼貫」（『鬼貫句選』①）もある。

おもしろく富士にすぢかふ花野哉　　嵐雪

『玄峰集』④所収。季題は「花野」で秋。江戸から京へ東海道を上る時、道の付き具合のせいでただ一ヶ所富士が左側に見えるところがある。広重の「東海道五十三次」中の「吉原」に描かれている。この句も、道の付き具合で花野と富士の配置がおもしろく見えるというのだろう。

しら雲や富士の峡より江戸幟　　長吁

『虚栗』⑪所収。季題は「幟」で夏。「江戸幟」は、端午の節句で、江戸の町に立っている幟。古くは紙でつくり、鍾馗などを描いた。たなびく雲をこの「江戸幟」に見立てた。「富士の峡」というのは、富士川流域を考えれば良いだろうか。厳密に言えば、富士山と他の山に挟まれた地域ではないが、他に見当たらない。

夕貌はすゝけぬ富士の枝折哉　　藤匂

『虚栗』⑪所収。季題は「夕貌」で夏。「枝折」は道しるべのこと。煙にもすすけずに白い富士、それと同じように白い夕顔の花が山道の道しるべのように咲いている。

雪の富士藁屋一つにかくれけり　　湍水

『あら野』⑤所収。季題は「雪」で冬。大きな富士を小さく詠んだ。後の時代には、「不尽かくす木もくたびれて落葉哉／白枝」（『古今俳諧明題集』⑯）という擬人法の句もある。

帰るかり富士の裾田の砂ふるへ　　長雅

『其袋』⑥所収。季題は「帰るかり」で春。「帰雁」との組み合わせが珍しい。「裾田」で、山並をなさず独立している富士の山容が表現されている。

白雪に黒き若衆や富士詣で　　其角

『花摘』⑪所収。季題は「富士詣で」で夏。富士山に詣でることで、六月一日から二十日にかけて行われた。この句、『五元集拾遺』③では「白雲に黒き若衣やふし詣」の形で収められており、「黒き」とは衣服のことだとわかる。講を組んで登山するのに、揃いの黒い服を着る習慣があったのだろうか。

富士の雪蠅は酒屋に残りけり　　其角

『五元集』③所収。季題は「蠅」で夏。雪が見えているので、「残る」といったのだろう。夏の富士は、さすがに雪が消えてきた、又は消えてしまったという詠み方と、まだ雪が残っているという詠み方がある。伝統的な後者の詠み方を、「蠅」という季題で俳諧化した。

馬はゆけど今朝の富士見る秋路哉　　鬼貫

『鬼貫句選』①所収。季題は「秋路」で秋。「夕ぐれにまた」と前書がある。裾野の広さは、「富士に添うて三月七日八日かな／信徳」（『俳諧古選』①）など、多く詠まれている。古いものでは、『本朝文粋』に収められた都良香の「富士山記」に「其の霊基の盤連する所を観るに、数千里の間に亙る。行旅の人、数日を経歴して、乃ち其の下を過ぐ。之を去りて顧み望めば、猶し山の下に在り。蓋し神仙の遊萃する所ならむ。」と書かれている。どの辺りまでが裾野と考えられていたかについては、『東海道中膝栗毛』に「降くらし富士の根ぶとをうちすぎて江尻に雨の霽あがりたり」という狂歌がある。江尻（清水市）あたりまでと考えられていたようだ。

八雲立京に秋たつ富士に立　　鬼貫

『俳諧七車』⑫所収。季題は「秋たつ」で秋。前書に「出雲国風水、東武に行なんとて、京にのぼりけるにあひて」とあり、餞別の句。「八雲立」は「出雲」の枕詞だから、地名を順に詠み込んである。「立つ」で韻を踏んでいて調子が良い。この句も「江戸の富士」として詠んでいる。

によつぽりと秋の空なる富士の山　　鬼貫

『鬼貫句選』①所収。季題は「秋の空」で秋。前書に「富士の形は画るにいささかかはるとなし……」とあり、富士を目にした感動を詠んだものだ。秋の句は、特にことわりがなければ「天高く馬肥ゆる」というように空がきれいで、裾野までくっきりと見えている富士を想像するべきで、この句は他の句の解釈の助けにもなる。鬼貫には富士の句が多い。

品川に富士の影なきしほひ哉　　闇指

『続猿蓑』⑤所収。季題は「しほひ」で春。潮が引いて、いつも海面に映っている富士が、今日は見えない。はっきりこの句からというわけではないが、次第に名所としてではなく、日常の富士の姿が詠まれるようになる。

ものゝふに川越問ふや富士まうで　　望翠

『続猿蓑』⑤所収。季題は「富士まうで」で夏。「川越」は「かはごえ」ではなく「かはごし」。「ものゝふに」と言っているので、作者は町人か農民かだろう。このような句が、『続猿蓑』に入っていることから、富士詣の広く行われ知られていたことが想像される。「垢離へ来て道教けり不二の影／涼袋」（『古今俳諧明題集』⑯も同じ趣向。

門口に富士見えぬ日の寒さ哉　　沾洲

『俳諧古選』①所収。季題は「寒さ」で冬。芭蕉の「霧しぐれ」の句が「面白き」と言っているのに対して、こちらは「寒さ」を感じている。そこに、旅と日常の違いが読みとれる。「富士白う闇に聳へて夜寒哉／萬鈴」（『俳諧発句類聚』⑬）もあるが、こちらは旅とも日常とも解釈できる。

今や牽く富士の裾野の蝸牛　　仙鶴

『俳諧古選』①所収。季題は「蝸牛」で夏。前書に「象のわたりける年」とある。享保十三年のことだろう。この時のことは、多くの文献に見られるが、『江戸名所図会』巻之四、第十一冊の中野宝仙寺によれば、牝牡二頭が六月十九日に長崎に上陸し、翌十四年、大坂、京を経て五月二十五日に江戸に到着したとある。この句は、大きな象を小さな蝸牛に見立てて、富士の雄大な様を詠ったもの。

はつ雪の富士を軒端にすゝみかな　　也有

『蘿葉集』⑭所収。季題は「すゞみ」で夏。富士の初雪は実際には秋で、この句は前出の『万葉集』の歌に拠ったものか。或いは、雪解けしつつあるものを勘違いしたものか。もう少しストレートだが、「不二の雪たしかに見えてあつさ哉／崔睢」（『古今俳諧明題集』⑯）も同じ趣向。

富士に雪見る日や笠は重からず　　也有

『蘿葉集』⑭所収。季題は「雪」で冬。前書に「富士見西行に」とあり、画賛。也有の富士の句には、画賛や餞別が多い。

四方山の錦や富士にはづかしき　　也有

『うづら衣』⑮所収。季題は「山の錦」で秋。富士は雪化粧している。紅葉した山が気後れするほどの美しさだという句だ。同じ趣向の句で、『蘿葉集』⑭には「富士はたゞ袴に着たる錦かな」が収められている。

富士の笑ひ日にく高し桃の花　　千代

『千代尼句集』⑩所収。季題は「桃の花」で春。春の季題に「山笑ふ」があり、「富士の笑ひ」はそのことを言っている。

名月や何所までのばす冨士の裾　　千代

『千代尼句集』⑩所収。季題は「名月」で秋。「によっぽりと」の句で書いたのと同じく、澄んだ月夜に富士の裾がはっきり見えるという句。反対を詠んだものに「ふじ山を根引にしたるかすみ哉」（『崑山集』②）がある。また、「月の照いづくに富士のかげぼうし／冰花」（『其袋』⑥）もあるが、見えない「かげ」を詠むよりも見えている「裾」を詠んだ方が印象鮮明だ。

みじか夜や雲引残す富士の峯　　太祇

『太祇句選後編』⑩所収。季題は「みじか夜」で夏。『万葉集』巻三に「白雲も　い行きはばかり（三一七）」、「天雲も　い行きはばかり（三一九、三二一）」という表現が見られる。「雲引残す」は、これを意識したものだろうか。

不二ひとつうづみ残してわかばかな　　蕪村

『蕪村句集』④所収。季題は「わかば」で夏。この場合は、富士が雪をかぶっていてもよいし、かぶっていなくてもよい。也有の「四方山の」と同趣向だが、「はづかしき」と印象を詠み込んだ也有に比べて蕪村の方が叙景的、色彩的だ。

湖へ富士をもどすやさつき雨　　蕪村

『蕪村句集』④所収。季題は「さつき雨」で夏。『富士山の本地』には、「この天皇（孝安天皇）の御宇、九十二年、かのへさる、夏六月、駿河國富士の郡に、一夜の内に、大山涌出、（中略）その時、あふみの國の水海。一夜のうちに、出きたりけるとなん。申なり。」というように、富士山と同時に琵琶湖の誕生が書かれている。このような伝説が、下敷きになっているのだろう。

不尽の影摺んでうつす清水かな　　麦水

『古今俳諧明題集』⑯所収。季題は「清水」で夏。夏の句で、雪も参拝登山も意識していないのは、珍しい。

富士の雪見て造りけん一夜酒　　蓼太

『俳諧発句類聚』⑬所収。季題は「一夜酒」で夏。一夜酒とは甘酒のことで、歳時記には「けふつくればあすは供する故也。」（『増山井』ほか）と説明している。

中天へ不尽おしあげて潮ひ哉　　涼袋

『古今俳諧明題集』⑯所収。季題は「潮ひ」で春。海岸から潮が引いて、富士が高くなった。波打ち際まで下がってみると高く見えるというよりは、船から見た景と解するべきか。

手にのせて富士を憐むかれ野哉　　春来

『俳諧新選』⑩所収。季題は「かれ野」で冬。富士を小さく詠むという趣向。「武蔵野と富士」の句と考えてよい。

不二見んと氷に立や諏訪の海　　蘭更

『半化坊発句集』⑩所収。季題は「氷」で冬。諏訪湖は富士の名所だったようで、「鴨の巣や富士の上こぐ諏訪の池／素堂」（『とくくの句合』⑫）など他にも詠まれている。また、小山田与清の『松屋筆記』に「信濃諏訪の池にうつれる富士の形は逆さま也。逆富士といふ。（巻八十、卅一）」とある。下諏訪側からだと、諏訪湖を挟んで富士と向き合うので、手前に頂上が見えるということだろうか。

一日の冬にむかふや不尽詣　　巳十

『古今俳諧明題集』⑯所収。季題は「不尽詣」で夏。江戸時代、富士登山の紀行文が数多く書かれていて、登山ルートや山上での過ごし方などが克明に記録されている。どれも多少の誇張があるだろうが、「一日の冬にむかふ」という様子がうかがえる。一例として、植村政勝の『本朝奇跡談』を引用しておく。

「享保九辰年六月廿九日未刻予富士山江登る。六七分登りたる時。左右に大雷三ヶ所鳴。大風雨なり。此大雨山の下より降り。段々山上へ降上る。雨次第に雪に成て。其夜寒き事厳寒のごとし。富士の山上岩窟に草鞋はきながら其侭上下押合こぞり居て夜を明す。岩窟の口に積る雪。壱尺弐寸に及べり。六月雪の降有様珍敷事に覚ゆ。」

晩鐘にふじをゆり出す野わき哉　　末了

『古今俳諧明題集』⑯所収。季題は「野わき」で秋。芒か何

かが揺れて、そう見えるのだろうか。そう考えると、「春風の押動かすや雪の富士／不驀」（『俳諧発句類聚』⑬）の「春風」より「野わき」の方がしっくりくる。

伸上る富士のわかれや花すゝき　　几董

『井華集』⑩所収。季題は「花すゝき」で秋。花穂を付けるので、芒は尾花ともいい、「花すゝき」も「すゝき」と同じものを指す。芒の上に見える小さな富士を、背伸びして別れを告げるように眺めたということだろう。

晴るゝ日や雲を貫く雪の富士　　几董

『井華集』⑩所収。季題は「雪」で冬。冬の晴れた朝には、私の通学する地下鉄東西線からも富士山が見えることがある。鬼貫の「によっぽりと」の句もあるが、正面から富士を詠んだ句は意外に少ない。

秋風のふく程白し富士の山　　李丈

『俳諧新選』⑩所収。季題は「秋風」。次第に雪が積もって、白くなっていく。「門口に」の句と同様、「日常の富士」。

駅々の富士画き行く春日哉　　甘谷

『俳諧発句類聚』⑬所収。季題は「春日」。春の一日の意。

馬方の見せて乗せけり春の富士　　午心

『俳諧発句類聚』⑬所収。季題は「春」。前の句と同様、旅の一点景だ。どちらも、春ののんびりとした旅の景を描こうとしたら偶然にも富士があったという形の句だ。焦点を定めて富士を詠んだ句の他に、このような詠み方も現れてくる。

水鳥の富士引寄せて槐かな　　吐月

『俳諧発句類聚』⑬所収。季題は「水鳥」で冬。「槐」は「まくら」の当て字らしい。「浮寝鳥」という呼び方もあり、眠っている水鳥が、富士の影に引き寄せられるように流されている様子。小さく詠んだ面白さとともに、枕にすべき信頼感があらわれている。

初夢に猫も不二見る寝やう哉　　一茶

『一茶発句集』④所収。季題は「初夢」で春。「一富士二鷹三茄子」の富士だ。しかし、これには諸説あったようで、百井塘雨の『笈埃随筆』には「世の人此山を夢見る時は吉瑞なりとて、一ふじ二鷹三茄子とて同く吉兆とす。或人云、此三事夢の判にはあらず。皆駿州の名産の次第をいふ事也。」という説も載せている。この句は、気持ちよさそうに眠る猫を詠んでいる。一茶の、動物に対する暖かい視線が、あらわれている。

引用文献一覧

①佐々醒雪他校訂『名家俳句集』俳諧叢書第三冊　（一九一三年・博文館）
②中村俊定他校注『貞門俳諧集』古典俳文学大系第一巻　（一九七〇年・集英社）

③老鼠堂永機他校訂『其角全集』俳諧文庫
（一九一一年・博文館）
④藤井紫影校訂『名家俳句集』有朋堂文庫第87
（一九二七年・有朋堂書店）
⑤白石悌三他校注『芭蕉七部集』新日本古典文学大系70
（一九九〇年・岩波書店）
⑥大野酒竹校訂『元禄名家句集』俳諧文庫
（一九一二年・博文館）
⑦尾崎紅葉校訂『俳諧類題句集』前編・俳諧文庫
（一九〇九年・博文館）
⑧大芭蕉全集刊行会編『大芭蕉全集』第一巻
（一九三五年・大芭蕉全集刊行会）
⑨富山奏校注『芭蕉文集』新潮日本古典集成第一七回
（一九七八年・新潮社）
⑩島居清他校注『中興俳諧集』古典俳文学大系第一三巻
（一九七〇年・集英社）
⑪石川八朗他編『宝井其角全集』編著篇
（一九九四年・勉誠社）
⑫大野酒竹校訂『素堂鬼貫全集』俳諧文庫
（一九〇九年・博文館）
⑬尾崎紅葉校訂『俳諧類題句集』後編・俳諧文庫
（一九〇九年・博文館）
⑭岡野知十校訂『也有全集』俳諧文庫
（一九一一年・博文館）
⑮清水孝彦他校注『中興俳論俳文集』
古典俳文学大系第一四巻（一九七一年・集英社）
⑯建部綾足著作刊行会編『建部綾足全集』第二巻
（一九八六年・国書刊行会）